

生活支援、住宅支援、財産支援、遺品整理など

過日、NHKスペシャルで「老人漂流社会 "老後破産" の現実」と題して、独居の高齢者、いわゆる「おひとりさま」のおかれた厳しい現実の一端を取り上げていた。番組では国民生活基礎調査をベースにして、独居の高齢者数が単身高齢者約600万人、年収が生活保護水準（月額約13万円）を下回る人が半数近くの300万人いると推計した。詳細な内訳は年金受給額が年間120万円未満の人たちが46%で、そのうち生活保護を受けている人が70万人、200万人余りが生活保護水準を下回る額で生活しているとした。日本国憲法第25条には「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」とうたわれている。このセーフティネットが生活保護だ。それさえもままならないのが今の現実なのだろう。自営業者などが加入する国民年金（老齢基礎年金）の年金額は今年4月から改定（-0.7%）され年間778,500円になった。40年間年金を払い続けて受給できる金額がこの数字である。

おひとりさまによる孤立（独）死も自治体などでは喫緊の課題ととらえている。東京都大田区を本社にするキーパーズ有限会社は数多くの孤立死の現場を遺品整理という形で見てきた。近年は孤立死防止の啓発にも力を注いでいる。埼玉県さいたま市見沼区のNPO法人みぬまで暮らす会は、最後まで地元で暮らすために積極的な生活支援を展開している。東京都中央区のNPO法人ら・し・さは、ファイナンシャルプランナー（FP）を中心に集まり、資産などの終活支援をして注目されている。東京都江戸川区のNPO法人ほっとコミュニティえどがわは、終の棲家として高齢者と若者がともに暮らす「ほっと館」を建てた。それぞれの得手を生かした取り組みを聞いた。



case 1 キーパーズ有限会社（東京都大田区）

遺品整理の現場から見えてきたもの
孤立死への対応へ積極的に取り組む

創業当初からその取り組みにマスコミも高い関心を寄せていた。2002年に日本初の遺品整理サービス会社として産声を上げたキーパーズ有限会社（本社：東京都大田区、吉田太一社長）は、高齢化社会に一石を投じさまざまな波紋を今も投げかけている。吉田社長自らが孤立（独）死などの現場から学び「よりよく生をまとうしてほしい」と上梓したのが『おひとりさまでもだいじょうぶ』（ポプラ社）だ。ジェンダーのスペシャリストでもある社会学者の上野千鶴子氏（現東大名誉教授）と、「おひとりさまの性（男女）差」について特別対談も採録されている。またシンガーソングライター、小説家など多方面な活躍をしている歌手さだまさし氏による同社をモデルにした小説『アントキノイノチ』（幻冬舎）が映画化され、大きな話題となったのが3年前のことだ。自治体や企業・団体などからの講演依頼を受けることが多い吉田社長は、日本各地で年間60件近い講演をこなし孤立死などの啓発活動にも余念がない。ここに至るまでの経緯や遺品整理事業から見えてきたおひとりさまの実態を吉田社長に聞いた。



吉田太一社長

社会とのはざまで葛藤する10代

吉田社長は1964年東京オリンピックの年に生まれた。幼いころは引っ込み思案なところもあったと自任するものの、小学生の高学年になるとスポーツ、とくに水泳の練習に奮闘した。中学生になると地域の水泳大会で上位入賞の常連ともなっていた。高校への進学では当時、大阪府で初めて公立高校に体育科が設置されたこともあり、同科の1期生として入学し水泳部と陸上部に在籍した。1980年のことだ。府内全域から優秀な人材が集まり厳しい指導も相まってか、同じころに在籍していた生徒の中には、のちにプロ野球選手やオリンピック選手（フィギュアスケート）になるアスリートも輩出している。

将来はスポーツを職にしようという思いもあったが、飛び抜けた人材が身近にいたこともあり、その難しさをこの多感な時期に感じ取っていた。ただ、1年生のときに体育の授業が長野県のスキー場で行われ、雄大な大自然のゲレンデの中で滑降するスキーの楽しさを知った。もっとスキーを滑りたいと部活をやめてしまい、飲食店などでアルバイトをし

ながらスキー費用をためるようになった。冬休みには信州の民宿やスキー場でアルバイトをしながらスキーを楽しみ、メキメキと上達していった。学校にもそれが伝わり、3年生のときには体育の先生に依頼され1年生にスキーを教えることにもなった。高校では若干の挫折感も味わったのだが、この一件が後に人を雇うということに役立ったと新聞のインタビューで述懐している。

高校卒業後の進路としては体育の先生も視野に入れていたのだが、一方で自身で何か商売をしたいという夢も漠としてあった。飲食店のアルバイト経験もあったことから調理師学校を選択し、その後神戸市のホテルに和食の板前として入職し修業を始めた。運動神経の良さという手先の器用にも通じる。また感性の鋭さもあってすぐに頭角を現し、師匠でもある料理長に気に入られることになる。とはいえ周りの先輩たちからは反発をくらった。

職人の世界はある意味で理不尽もある。理屈に合わなくとも、納得しなければならないことも起こる。スポーツをやっていてプライドが高かった吉田社長はこの徒弟制度にははじめず、違和感を覚えた。



著書の『おひとりさまでもだいじょうぶ』と、エンディングノートのおひとりさまでもだいじょうぶノート。(右)



TSCテレビせとうちの番組「TSC news5」で岡山市市民局生活安全課主催の講演の様子が放送された。インタビューを受ける吉田社長

そして21歳のときにひとり上京し、自身の腕を試したいと考えた。運の強さ、押しの強さ、そして真骨頂でもある人なつこさが気に入られ、渋谷区恵比寿で新規オープンの店の責任者として任せられることになった。しかし、社会経験不足ややる気だけではどうにもならず1年足らずで閉店してしまうことになる。

その後再び都内の日本料理店で働き、伴侶を得たことをきっかけに大阪に戻ることになる。

遺品整理サービスの萌芽

大阪では、大手運送会社の「給料がいい」ことを聞きつけて、板前の仕事に見切りをつけてそこで懸命に働いた。3年過ぎたころには自宅を建てた。年収も良かったせいもあって、20年も30年もローンを組みたくないといふ10年ローンを組んだ。土地が高騰してバブル期の高い買い物で、月々の返済が50万円弱に及んだ。

勤めて5年が過ぎたころに、高校卒業後に考えた自分で商売をしたいという思いが増していく。ローンがあったのだが、会社を辞めてしまいコンビニ経営を模索した。しかしそれも実現できず、自己破産寸前に陥ってしまった。

そこで一念発起し1994年に大阪市で個人事業として運送会社を立ち上げ。もう失敗できないと腹をくくり、生来のサービス精神やこれまでの客商売の経験を生かし、引っ越しで困っている人には徹底的にサービスした。見事に的中し引っ越しの依頼は

引きも切らずにあった。

さらにインターネット創世期ともいえるこのころ、すでに自社のホームページを立ち上げた。1997年だ。これも功を奏した。ちなみに日本ではヤフーの検索サービスが始まったのが1996年だからその取り組みの早さがわかる。

そして引っ越しの際に出る不用な家具なども買い取り、それをリサイクルして販売する「ひっこしやさんリサイクルショップ」をオープンさせた。このビジネスモデル自体が引っ越し業界ではどこも試みていなかったことから、マスコミからの取材攻勢もあつた。1999年には法人化し吉田物流株式会社となった。

2000年ごろに、いつものように1件の引っ越しの依頼を受けた。50代とおぼしき姉妹で、東京と横浜在住ということで家財道具をどこに送るか指示された。部屋にはまだ多くの家具類が残されていた。「どうするのですか」と吉田社長が尋ねると、これから処分する業者やリサイクル店を探すとのことだった。「それならすべてお手伝いさせていただきます」と吉田社長が応じると、「本当に? 神様に見えるわ」と諸手を挙げて喜んだという。これほど喜ばれることはあまりなかった。2人と話していると、後ろに遺影と骨壺が見え、吉田社長は遺品整理であることに気付いた。そのときに「これはいける」とひらめいた。さっそく事務所に帰って電話帳やネットで「遺品整理」を検索しても、専門でやっている業者は見当たらなかった。大阪市淀川区、ここが遺品整理サービスの端緒となった地でもある。

それから約2年の準備をへて2002年10月にキーパーズを愛知県刈谷市で創業した。2004年8月に

最初のテレビ局の取材を受け今まで、多い年には新聞、雑誌、テレビなどを含め年間40回ほどのメディア露出があった。これほど多く取り上げられるのも、社会や地域と縁を持たなくなつた無縁社会の進展とともに、大きくクローズアップされてきた孤立死というものに遺品整理サービス事業が内包されているからだ。

家財道具の共有から占有の時代に

国立社会保障・人口問題研究所によると少子化や未婚率、離婚率の上昇、配偶者との死別などによって単身世帯数が増加し、高齢者世帯に占める単身世帯(おひとりさま)の割合が3割超となっている。また5年に1度行われる総務省の住宅・土地統計調査(平成25年)が7月に発表され、空家数は820万戸で総住宅に占める割合は13.5%だった。おひとりさまの現状を表している数字だ。吉田社長は次のように分析する。

「日本においてももともと家財道具は共有の財産だった。しかし核家族化の進展や別居などによって一人住まいが多くなったことから、共有から占有の財産に変化してきた。本来処分する必要がなかった共有財産が占有財産に代わったことで、ひとたび遺品になると無用のものになってしまう。そのため片付けないといけない。となると遺品整理をサポートする会社が必要になる。また残された遺品というのはその人の生きざまを物語っている。だから、最後まできつと片付けてあげなければならない。そのようなサービスを日本で初めて選択肢として作ったといえます」

マスコミに取り上げられたり、日本初のサービスということで依頼は増える一方だった。しかしスタッフの数が追いつかなかった。求人サイトに出してもなかなか応募がない。そこで現場の様子を知つてもらおうと、あえて関西弁を使ってブログ(現実ブログ「遺品か語る真実」)にしたためていった。リアルな迫力と吉田社長の独特的の言い回しでおもしろさも相まって毎日2,000人近い人がフォローしていた。これを見ていたのがつねにアンテナを広げている出版社の編集者だった。2006年にこのブログを再編集して刊行されたのが『遺品整理屋は見た!』

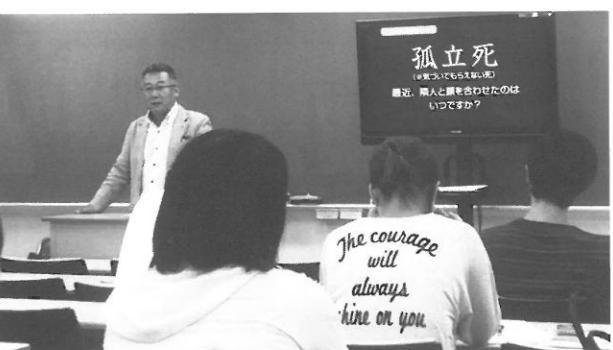
(扶桑社)だった。文庫本や幻冬舎からも出版されている。遺品整理屋は見たを原作としてテレビドラマ化もされた。吉田社長はこれまで9冊の本を上梓しており、現在日本ペンクラブ会員でもある。

「結局、求人自体はあまり伸びなかつたが、現在いるスタッフのほとんどが本などを見てきた人たちばかりです」。少数精鋭ながら、まさに吉田イズムが社員に浸透しているといえよう。

また2007年にNHKで放送された「ドキュメント ippou no saisho」では、「天国への引っ越し手伝います」というタイトルで同社の仕事をクローズアップした。反響が大きく歌手のさだまさし氏もテレビ棧敷にいた。吉田社長に会いたいということで連絡が入り、こんなやりとりがあった。さだ氏はNHKを見た後にすぐ『遺品整理屋は見た!』を手に取り読み込んだという。「人の嫌がるような仕事をどうしてこの若い子たちが、やりがいを感じながらできるのですか。どのような教育をされていますか」とさだ氏。「とくに何の教育もしていません。ただ、お客様からの『ありがとうございます』という言葉が彼らを育てています」と吉田社長。そして、さだ氏の小説『アントキノイノチ』(幻冬舎、2009年刊行)は生まれた。

2011年に映画化され海外でも高い評価を得た。小説や映画では社名はクーパーズになっていた。「クーパーズという社名を使って他社が遺品整理の仕事をしたら困る」と考え、すぐに商標登録した。これが一つのきっかけになって、事前整理専門の部署をクーパーズと命名してスタートさせた

このクーパーズでは事前整理に加え、昨年から「高齢者住宅入居パック」を本格的に展開している。老人ホームや高齢者施設の入居に際しては、室内の広さが限られているため多くの家財道具などを処分しなければならない。さらにこのときに発生する土



駿台トラベルホテル専門学校での講演



地や建物など不動産の売却のサポートなども行い、サービスの一元化することで本人や家族の負担を軽減させている。

孤立死をなくしたい

同社の依頼件数は年間 1500 件ほど。病院と自宅で亡くなる割合はほぼ半々という。自宅で亡くなつた人のうち死後 1 週間から 10 日経て見つかる孤立死が 3 割に上る。吉田社長は創業して半年ほどたつたころ、死後 3 週間たつて発見された部屋の遺品整理をした。部屋には異臭が漂い鼻をついた。遺族の前では平静を装ったが汗が一気に引いたという。これをきっかけに徹底的に臭気について学び、同社オリジナルのオゾン消臭を実施している。

「亡くなること自体は自然の摂理の一部だけれど、やはり部屋で亡くなると迷惑をかけるというケースもある。さまざまな現場を経験し、単純に一人住まいがいけないということではなく、人間関係を断ち切ってしまうことがだめなのではないかということに気付いた。一人で住んでいても人間関係を構築し、人生を謳歌している人はたくさんいる」

また吉田社長は「孤独死、という言葉に違和感を持つ。「孤独に生きること自体、他人がとやかく言う問題ではない。社会に背を向けて孤立して生きるから亡くなつてもご遺体がなかなか発見されないとということになる。そういう意味では『孤立死、という言葉なら納得できる」

この孤立死にメスを入れたいと、自治体や行政機関などへ啓蒙する DVD を 2008 年から無料配布している。同年にはエンディングノートの無料配布もスタートさせた。そして 2011 年からはオリジナル

のエンディングノート「おひとりさまでもだいじょうぶノート。」を製作し、もちろん無料で配布している。前出の『おひとりさまでもだいじょうぶ。』のタイトルや表紙デザインを引用し、おひとりさまにとっては十全な内容となっている。遺品整理のページもさることながら、これから顕在化するといわれているおひとりさまとペットの部分にも目を向けるあたりは、これまでの経験値の賜物といえる。各新聞社などの紹介や講演会などの配布も含め、これまで 12 万冊出ている。

また社会から孤立していく人たちを何とかしたいと、講演に東奔西走する日々でもある。取材中にも講演依頼の電話があった。この 10 月 1 日から 16 日までの講演日程は大阪、福岡、都内と 5 カ所で実施した。主催元は社協や自治体を始め、医療関係団体、葬儀社、寺院などとなっている。主催者がタイトルとして時に「おひとりさま」を冠することもある。講演内容は吉田社長が現場から学んだ孤立しないためのアイデアがふんだんに盛り込まれ、自治体関係者にとっては知りたい部分でもある。現実に目を向けると悲惨な話だが、吉田社長のユーモアあふれる関西弁の語り口がやわらげている。その一端を話してもらった。

「おひとりさまからの問い合わせではほぼ 3 割ずつ、身内がいない、身内に迷惑をかけたくない、身内とは縁を切っているという人たち。男性は女性に比べコミュニケーション能力が落ちるといわれていて、世間話ができなくて、一方で会社人間だった人ほどプライドが高く、そのため助けてほしいと声に出して言えない。逆に女性は話すことでスッキリする。孤立しないためにはまず、孤立死は他人事ではないという意識をもつこと。そして 1 人の親友よりも身近な友人を複数持つことも大切だ。かりに何歳まで生きるかを決めておくことで、残りの人生を意識することができる」

日本人の心に根ざしていることわざに「立つ鳥跡を濁さず」がある。ある年代以上の人たちと括っていいのか分からぬが、このことわざはその人たちにとって生きる上で一つの指針となっている。何らかの理由でそれまで疎遠であっても、きちんと最期を整理したいと行動に駆り立てる言葉でもある。この部分を喚起させ、目を向けさせてるのがキーパーズ（吉田社長）の遺品整理サービスといえる。